

一人一人の個性を
大事にする教育を

岡 孝

山口県立下関中央工業高等学校
土木科長教諭

山口県立下関中央高等学校校舎

一人一人の生徒から「こんにちは」とはつらつとしたあいさつが飛ぶ、山口県立下関中央工業高等学校。校訓である『質実剛健』の言葉通り、授業に部活にと積極的に取り組む生徒達の姿がここにあります。「ここ数十年クラブ活動の活発化から、元気のいいあいさつが聞かれるようになり、学校の雰囲気もよくなりました。来客される方にも評判がいいんですよ」と話される、土木科長の岡孝先生。同校は昭和43年に創立され、現在は生徒数約150名。機械科、造船科、建築科、土木科、化学工業科の5科があります。平成10年に第1実習棟が建てられるとともに、新しい実習機材を多く取り入れ、1、2、3年を通してトータルステーションを使った授業を行うなど、実践に近い形で授業に取り組んでいます。今回は土木科3年生37名の実習の様子を見せてもらいました。

実習は5つのコースに分かれています。配合設計をしてテストピースを作成、圧縮試験、鉄筋の引張試験、比重試験等を行う「材料試験」。ゲートの水流実験等を行う「水理実験」。密度試験、粒度試験、一面せん断試験を行う「土



竹野内政勝

山口県立下関中央工業高等学校
測量実習教諭

質試験」。土木構造物の製図を行う「CAD実習」。丁ばり、くい打ちを行う「測量実習」。1コースを6〜7人のグループに分かれて学習し、1年間ですべてのコースをまわります。



でいました。「今の学生は、幼い頃からスコップを使う経験というのがあまりないのかもしれないですね。そのために新鮮なのか、楽しそうに作業をしますよ。」と話されます。

もともと同校では現場で通用する人材の育成を目標にしており、インターンシップ制度も2、3年生は全員参加。地元である下関市や豊浦町、菊川町の企業で2日間の就業体験をします。その他にも卒業生が就職した企業に協力を依頼するなどして、できるだけ多くの現場を見せるようにしているとのこと。

「現場を見るとやはり、何かしら感動を受けるようで、帰ってきた後、みんな良い反応を示してくれます。また、そこで見たことを学校で実践、応用することで、しっかりと生徒達の身につく。机上でする難しい計算も必要ですが、一番の学び場は現場ですよ。体で覚えさせるという感じですね。」と話される竹野内先生。

このような指導のもと生徒の自主性が育まれるのか、学校の花壇が壊れた時には、生徒達が自らその修復を行い、出来上がった花壇には生徒達の手形が誇らしげに付いていました。先生は「形はまだみたいびつですが、上出来でしょう。」と微笑まれました。


 A photograph showing three students in a classroom setting. On the left, a male student with glasses and a white shirt is looking down. In the center, a female student with dark hair is also looking down. On the right, another male student in a dark shirt is looking towards the right. They appear to be observing something out of frame, possibly the flower bed mentioned in the text.

近年は、就職希望者が全体の3分の1、進学希望者が3分の2の割合になっており、これは昔とは正反対の数字。「なかなか厳しい状況ですが、それでも積極的に就職に向けた教育をしています。企業によって求められる人材は様々で、真面目な者がいいところもあれば、少しくらいやんちゃでも元気のいいほうがいいところもある。生徒達も十人十色ですから、卒業生の情報を参考にしながら、本人達にあった会社を見つけ、のびのびと仕事をしてもらいたいと思いますね。」と竹野内先生。

また、岡先生は「仕事を円滑にする上で一番必要なのは、人とコミュニケーションをとる能力です。友達、先輩、先生など、たくさんの人と触れあうことのできる学校という場所で、会話やあいさつを通して、人とのコミュニケーションの大切さを学んでほしいと思っています。」と話されていました。

どの実習も、先生と生徒との明るい会話が飛び交う活気のある授業風景。のびのびとした生徒達とその個性をしっかりとのびさせていこうとする先生方の姿がありました。技術や知識を身ににつけるのももちろん大切ですが、個人個人が自分らしく学習できる場こそ学校であると改めて感じました。

教育現場訪問 ②

山口県立宇部高等学校／総合学科環境緑化系

**見て納得！現場見学は
夢をはぐくむ貴重な体験の場**



建設業への理解を深めてもらうと山口県建設業協会では山口県土木建築部の協力を得て毎年、高校生を対象に「建設現場見学会」を行っています。今年度参加した高校は、県内の8校。その中の一つ、8月25日に美東町と三隅町で行われた「宇部西高等学校」の建設現場見学会を取材しました。

この日の見学会に参加したのは同校の環境緑化系で学ぶ2年生と3年生32人。最初に向かったのは、山陽と山陰を結ぶ地域高規格道路としてその完成が待たれる国道490号道路改築事業「小郡萩道路」の「中山トンネル」工事現場。また覆工コンクリート打設の最中の薄暗いトンネルを初めて歩いた生徒の皆さんは興味津々の様子で、地域住民に騒音・振動などの影響を及ぼさないよう配慮しながら工事を行って

いるという県美称土木事務
所や現場担当者の説明に熱
心に耳を傾けていました。

続いて同じく小郡萩道路
の「第二大田川橋」へ。こ
の工事では環境アセスメン
トの結果、盛土で消失する
予定だったため池が、山口
県の準絶滅危惧種モリアオ
ガエルの産卵池であること
が判明。そのため計画案の
線形を移動して、ため池と
周囲の自然環境の保全を図
ったことなどの説明を受け
ました。

次は小郡萩道路工事に伴
う事前の埋蔵文化財調査で



発見された「錢屋遺跡」へ。ここは江戸時代、「寛永通寶」を鋳造した錢座が設けられていたところだったので、同様の遺跡は全国に十力所しかない上、精錬炉の場所が特定できなかったのはここだけという非常に貴重な遺跡だとのこと。「発掘調査後は道路をつくるため、その上に約2×3メートルの土が盛られて埋め戻されます」という説明に、皆さん、興味深そうに見学していただきましたが、突然激しい雨が降り出してきて残念ながら早めに切り上げることに。

そして最後に、三隅町と秋芳町との境にある大水峠から流れ出る辻並川をせき止めて造られる「湯



免ダム」の工事現場を訪れました。湯免



ダムは長さ200メートル・高さ46メートル・総貯水容量74万立方メートルの重力式コンクリートダムで、平成18年3月完成の予定。洪水防止、既得取水の安定化、河川環境の保全、生活用水の確保といった建設目的の説明を受けた後、工期短縮と経費節約につながる、山口県では初の「拡張レーアー工法」を取り入れた工法であることなどの説明を受けました。

